



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 29

プロとしての「知識のギャップ」を保つには

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

情報通信技術(ICT)の普及によって 「知識のギャップ」が埋まりはじめた

ICTの普及は、知識の入手方法も飛躍的に変えました。これは、薬剤師にとっては2つの意味を持つと思います。

1つは、薬剤師自身の情報へのアクセスがきわめて簡単になったということです。以前は、大学時代の教科書を引っ張り出したり、新しく書籍を買い直したりと、実際の本を手に入れなくてはならなかったのですが、最近は、インターネットとモバイルデバイスの普及により、どこでも最新の知識を手軽に得ることができます。換言すれば、打ち込むべき検索ワードを知っていれば、そのことは知っているのと同じです。最新かつ正確な知識を入手するためのハードルはきわめて低くなっています。

もう1つは、薬剤師以外の人たちが医薬品の情報にアクセスすることが容易になったことです。『医者からもらった薬がわかる本』(著:医薬制度研究会/発行:法研)という本をご存じでしょうか。最新版で第28版を数えるロングセラーですが、初版が出版された当時、この本は大変話題になりました。当時はまだまだ分業も進んでおらず、薬のPTPシートも、薬剤名が書かれている部分は簡単に切り取ることができた時代でした。そもそも医師と患者さんの関係も今とは異なっており、医療においては一般に「知らしむべからず」という風潮があったのかもしれませんが、薬に関する情報に患者さんがリーチするには制限があったことの現れではないかと思います。このような背景の医薬分業では、薬剤師が服薬指導で説明する疾病や医薬品の情報は、意味があったのだろうと思います。

しかし現在では、医薬品の情報はインターネットで簡単に検索できますし、スマートフォンのアプリでも、添付文書のデータベースに簡単にアクセスできるものが無料で配布されています。若干の情報リテラシーが

あれば、氾濫する情報のある程度より分けながら、患者さんは医薬品の情報に簡単にアクセスすることができます。

ギャップを保つポイントは 「自分についてはどうなのか？」

このように、こと医薬品の知識のギャップについては、ゼロになることはないでしょうが、以前よりも少なくなっているし、その傾向は今後も強まっていきます。やはり、薬剤師としてプロフェッショナルな部分を保つためには、今までと異なる取り組みが必要です。

この問題は医師にとっても、実は同様です。疾病や治療に関するTV番組や書籍はたくさんありますし、中には社会現象になるほどブームを巻き起こすものもあります。その中で、医師がプロとして一般の方と知識のギャップを保っているのは、大学で学び、その後のOJTや生涯研修で身につけていく知識をもとにしながら、患者さんごとについて個別最適化した情報を提供しているからだと思います。

たとえば、胃がんの患者さんは、胃がんという病気や、手術・抗がん剤・放射線療法、そして時には健康食品やサプリメントの情報などを、たくさん調べられ、一番確からしいと思う情報をまとめ理解されます。しかし、それらの情報が、いざ「自分にとってどうなのか？」を知ることはできません。病期(ステージ)がⅡとかⅢということを知識としては知っても、自分は一体どうなのかを知っているのは医師だということになります。この個別化された医師の知識が、患者さんの知識とのギャップを保ちます。バイタルサインやフィジカルアセスメントは、薬剤師が患者ごとの個別化情報を持つことになります。その解釈が、薬剤師が薬学部で学んだ専門性の高い知識に基づくことが、薬剤師のプロフェッショナルな部分を保つ知識のギャップにつながるのではないのでしょうか。